OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評・新刊紹介＞津田博司著　『戦争の記憶とイギリス帝国 : オーストラリア、カナダにおける植民地ナショナリズム』 / 根津由喜夫著『 ビザンツ貴族と皇帝政権 : コムネノス朝支配体制の成立過程』 / 與那覇潤著『中国化する日本 : 日中「文明の衝突」一千年史』 / 秋田茂著『イギリス帝国の歴史 : アジアから考える』 / 藤川隆男編『アニメで読む世界史』
Author(s)	酒井, 一臣; 權野, 友里江; 鷲田, 睦朗 他
Citation	パブリック・ヒストリー. 2013, 10, p. 142-159
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66521
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

津田博司著
『戦争の記憶とイギリス帝国
オーストラリア、カナダにおける植民地ナショナリズム』

刀水書房、2012 年 7 月刊、A5 判、x ＋ 228 頁、
4900 円＋税、ISBN978-4-88708-404-9

戦争の犠牲者をどのように追悼するか。この問題は、「帝国」日本としてアジア太平洋戦争に敗北し、周辺国家との関係を決定的に悪化させて、現在までその清算に苦しんでいる日本社会にとって、悩ましく政治的に「危険な」議論でありつづけている。それに対し、二度の大戦にいずれも勝利したイギリスにとって、犠牲者への悲しみはあるにせよ、戦争は輝かしい過去であり、称賛しておけばたりるもの。書評者は、こうした浅薄な認識しかもっていなかった。

本書は、第一次世界大戦から現在までのイギリス・オーストラリア・カナダの戦争の記憶のありかたを斬新な切り口で解明している。本書を読むと、「帝国」という枠組みでみたとき、二度の大戦が、帝国秩序の変容とそれに伴うナショナル・アイデンティティ形成という深刻な問題と関連しており、ときには苦い過去として、ときには厳しい現実との対話として、くりかえしよみがえっていることがわかる。より敷衍すれば、密接に関係する国民国家形成とナショナリズムが、自己と他者をともに傷つける戦争とその記憶になぜ結びつくのかという問題をあらためて考えさせられる議論でもある。イギリス帝国史を専門としない書評者には、個別の議論の研究史上の意義を考察することはできない。よって、上記の観点から、本書を紹介していきたい。

序論は、1954 年のエリザベス女王のオーストラリア訪問の描写からはじまる。イギリスとの紐帯が薄れ、アメリカに依存することになったとされる第二次世界大戦後も、オーストラリアでは帝国的スペクタクルが現出した。一体これは何なのか。著者は、そこに「ブリティッシュネス」としてのアイデンティティ、すなわち「帝国意識」の果たす役割をみるのである。一般に、「オーストラリア史」・「カナダ史」という文脈では、イギリス本国のアイデンティティと植民地のアイデンティティは相互排他的・二項対立的に扱われがちだが、それが「帝国意識」を通じて共存していた。この構造を解明するために、二つの世界大戦をめぐる「戦争の記憶」が重要になる。戦争の記憶が、「政治外交史的な構造変化の反映として帝国意識を叙述するのではなく、帝国規模の連帯意識を成り立たせる心理的紐帯の動態を示すもの」（15 頁）だからである。帝国の紐帯と分離の変数として「戦争の記憶」を位置づけることで、イギリス帝国の盛衰を考察するのが本書の目的である。

第一部では、大戦間期の戦没者追悼が帝国の構造を強化するものであったことが論じられる。第一次大戦の戦没者は、イギリス的価値観を守るための「正戦」を戦った者として追悼された。それを具現化するため、休戦記念日の 11 月 11 日 11 時に「二分間の沈黙」を捧げることになった（第一章）。戦争を記憶するための儀式が、帝国の空間でもつ意味は何だったのか。第二章ではカナダ、第三章ではオーストラリアでその点が検証される。カナダにおいても、大戦は「正戦」とされ、カナダ軍の犠牲は「高貴なる死」として称揚された。カナダの場合、イギリス系とフランス系の対立を顕在化させないため、「ブリティッシュネス」ではなく、帝国のための「高貴なる死」に焦点があてられて神話化されていく。ただし、著者は、追悼の象徴であった「赤いポピー」や「二分間の沈黙」がカナダでも広まった点を重視する。フランス系がいることの独自性ばかりに目を向けると、国民国家のカナダ史として自己完結してしまうが、現実には、カナダ兵士が帝国の一員として連帯感をもっていたことが、帝国の空間で記憶の共有がおこなわれた要因であった。

一方、オーストラリアでは、ニュージーランドとの連合部隊アンザック軍団が、戦争の記憶として神話化される。11 月 11 日にくわえて、ガリポリ上陸作戦が開始された 4 月 25 日がアンザック・デイとして定着し、ナショナリズムの「市民宗教」

となる。ただし、オーストラリアにおいても、国民国家誕生の物語としてアンザックが、同時に帝国との一体化の文脈で語られてきたことが指摘される。大戦の犠牲は、カナダやオーストラリアの独自性を目覚めさせるとともに、帝国の紐帯を強める働きもしたのである。その根拠として、著者が主張するのが、死の意義である。イギリス帝国軍としてイギリス的価値観を守るために戦ったからこそ「高貴なる死」なのであり、それをなしとげた両ドミニオンは自己称揚に値する存在として浮揚するのである。

ところで、第一部では、多大の犠牲によって勝ち得た平和と「正戦」の関係性にも着目される。犠牲の重さを考えれば、平和は絶対に守らなければならないとする議論を生んだ一方で、平和を乱す存在が現れれば再び「正戦」を行うべきだとする議論も生んだ。第二部では、この相反する議論が、第二次大戦にむかうなかで、帝国の構造にいかなる影響を与えたのかが検証される。

イギリスでは、第一次大戦後、絶対平和主義が唱えられるようになったが、この立場は戦争の記憶を美化することも忌避した。帝国もしくは国民国家の一体感を高めるための戦争の記憶の称揚が戦争批判の主張を生んで、社会に緊張関係ができる過程は非常に興味深い。ドイツ台頭のなか、絶対平和主義は、平和のために戦争もやむを得ないとする「相対的平和主義」の前に後退する。本書は、「正戦」の記憶が再生産されていくことを描くことで、なぜ底の浅い宥和政策が支持されたのか、いったん第二次大戦となるとなぜ「民衆の戦争」として一致団結できたのかという疑問を、社会史的に解き明かしている（第一章）。

オーストラリアでは、第二次大戦でもアンザックの伝統が引き継がれていく。一般に政治外交史では、アジアにおけるイギリス帝国の敗退により、オーストラリアはアメリカへの依存を強めたとされる。カーティン首相のイギリスとの決別姿勢がその証拠として挙げられるが、著者は、「戦争の記憶に根ざすオーストラリアのアイデンティティの次元においては、アメリカは共有すべき過去をもたない「他者」だった」（112 頁）とし、イギリス帝国との心理的な結びつきは、世界平和と民主主義、人種的優越、王冠への忠誠などの様々な論理的回路によって強調されつづけたとする（第二章）。むしろ、帝国への関心が薄らいだのは、イギリス本国であった。「正戦」を勝ち抜くため、階級的対立を克服して国民国家イギリスの「民衆の戦争」を戦うなかで、帝国の連帯は後景に退いたという。この点は、行論としては説得的だが、「民衆の戦争」となったことがなぜ帝国の連帯意識を薄くさせたのか、もう一段の説明が必要に思われる。オーストラリアやカナダで国民国家化と帝国の紐帯が相互排他的でないのであれば、イギリスでもそうだったのではないのか。イギリス本国の防衛とヨーロッパ戦線の危機的状況を前に、オーストラリアにまで手が回らなかったとする、従来の外交史の解釈を再構築もしくは発展しきれていないのが残念である。

第二部第三章と第三部第一章では、カナダの国旗制定問題が扱われる。日本社会では、日の丸旗への肯定を、戦争・過去を美化する反動的政治姿勢と安易に結びつけて批判する傾向がある。しかし、こうした発想は、国家像や国民像にかんする思考停止に過ぎない場合が多い。国旗問題が、ナショナル・アイデンティティの構築すなわち悪・権力の強制といった次元では語り尽くせないことを、この二章は教えてくれる。

ユニオン・ジャックが表象するのはカナダと帝国の紐帯であって、その独自性を否定することになるのではないか。これが国旗論争の起点であった。フランス系の住民にとって、イギリス的なるものではなく、イギリス系とフランス系が共同して戦ったカナダ固有の象徴で、戦没者は追悼・記憶されるべきであった。ところが、第二次大戦直後の議論では、イギリス系の人びとのユニオン・ジャックへの愛着が克服されず、国旗は未制定になる（第三章）。第三部第一章では、これを引き継いで 1964 年におこなわれた「大国旗論争」が分析される。著者は、論争のなかで、二つの大戦が「帝国」のための戦争ではなく、カナダのための戦争と読み変えられていくことに着目する。帝国にこだわる限り、「ブリティッシュネス」がつ

いてくるが、それではイギリス系とフランス系の分断は解消できなかった。フランス系はフランス的な象徴を掲げないことを主張するが、イギリス系はユニオン・ジャックへの執着を捨てなかった。結局、未来を志向すべきだとの意見が議論を解決に導き、メイプルリーフ旗がカナダ国旗となる。「大国旗論争は、帝国的アイデンティティに抑圧されてきたナショナリズムが、突如として覚醒することで起こったのではない。そこで論じられているのはむしろ、イギリス帝国への帰属意識が失われていくなかで、調和的な国民国家の拠り所をどこに見出すべきなのか、脱植民地化の果てにあるべき「カナダ」像とは何なのかという、「未来形」の問いであった」（150 頁）との指摘は、問題の本質を的確についている。国旗問題という政治的にデリケートな議論が、議会でどのように論じられ、その背景にイギリス帝国の構造的変容や戦争の記憶がいかに関係していたのか。ここまでの議論を包括し、同時によく整理された政策決定過程分析にもなっており、本書中の白眉といえる章である。

つづく第三部第二章では、オーストラリアにおいてアンザックの神話が脱植民地化されていくことが指摘される。カナダ以上に帝国との紐帯を重視したオーストラリアでも、イギリス本国の帝国放棄をうけて、アイデンティティの再編にあたらざるを得なくなる。イギリス帝国との一体感のなかで形成されたアンザックの神話は「古いナショナリズム」とされていく。1960 年代後半は、世界的にヴェトナム反戦運動がもりあがったが、オーストラリアでは反戦運動の矛先がアンザック神話に向けられた。これは「古いナショナリズム」・反戦論・ヴェトナム帰還兵士などが複雑に交錯する対立を生んだ。著者は、ヴェトナム反戦運動を「進歩的で過激な平和主義者と保守的なナショナリズムに基づく軍国主義という二項対立」（164 頁）で描くべきではないとする。たとえばオーストラリアの場合、反戦運動は、「新しいナショナリズム」すなわち「オーストラリアンネス」を創り出す過程での、国民的合意形成をめぐる軋轢だった。

この指摘は、きわめて重要である。日本の安保闘争や反戦運動は、反権威主義の進歩派の運動ではなく、敗戦によって失われた日本のナショナル・アイデンティティを求める「愛国」運動だったとする小熊英二の主張にもつながる。本書は、帝国の紐帯対植民地ナショナリズムやイギリス系対フランス系といった二項対立的な議論を退け、その交錯のなかに帝国の変容と国民国家形成の実情をみようとしている。歴史的事実の多面性を明らかにするには、これまでの歴史学研究が何らかのイデオロギーや思想的立場によりかかり過ぎていたことをもっと反省すべきだと、あらためて考えさせられる。著者はいわゆる「ノン・ポリ」なのではなく、様々なポリシーから自由になるために苦心しているのだと思う。

ただし、そうした著者の姿勢が、現代に近づくほど議論を平板化させてしまっていることも否めない。第三部第二章と結論では、「新しいナショナリズム」創造の苦悩と、戦争の記憶の国民国家的読み替えの諸事例が紹介される。そこでは、脱植民地化や多文化主義といった現代世界の特徴が、オーストラリアやカナダの現在のナショナリズムのありかたに影響していくことが強調される。しかし、戦争の記憶が帝国の象徴を「横領」して「新しいナショナリズム」の象徴に転化することを予定調和的に描きすぎではないかという疑問が残る。オーストラリア・カナダの政治情勢を熟知しないが、常識的に考えて、どこの国でも、変化への抵抗勢力が政治・社会に一定の影響をもっている。たとえば、結論では触れられないイギリスは、たしかに帝国を捨てたが、ヨーロッパとの一体感と一線を画したまま現在にいたっている。結論部では、現在の保革の政治論争や、ナショナリズムへの評価をめぐる左右の交錯した立ち位置などに、著書なりの評価や批判をもう少し説明してほしかった。

ところで、本書は、戦争の記憶をめぐるいわゆる「言説分析」を中心に叙述がすすんでいく。歴史学研究では、心性や記憶が重要なテーマになり、言説分析はめずらしい研究手法ではなくなった。書評者自身、外交思想の言説分析を主なテー

マにしていることを前提にしていえば、近年の歴史学の言説分析手法には問題が多い。史料の分析が、政治・経済・社会の実態と乖離する傾向が一つ。また、ほかの研究との差異化のためだけに意義の薄い史料・事例をとりあげがちなことが一つ。くわえて、言説の分析に酔ってしまい、難解な文章になる傾向もある。その点、本書は、国民国家形成を現実社会の動きに十分目配りしながら論証しており、読んでいて、歴史の事実の解釈なのか、書き手の思想論なのかわからなくなるようなことはない。これには著者の研究姿勢もあるが、本書の文章が読みやすいことも関係しているであろう。

文章の巧みさから読み流してしまいそうになるが、本書を通じて気になった点を二点指摘しておきたい。

まず、書評者が最後まで理解できなかったことは、本書が帝国の構造を解明したのかという点である。たしかに、著者の議論は白人自治植民地にはあてはまるが、それ以外の植民地にはあてはまらない。この点は、序論で「帝国支配の矛盾が暴力的に顕在化したアジアやアフリカなどの事例を想定」すれば「必然的に、イギリスによる帝国支配と植民地ナショナリズムが対立的な構図で描かれる」（17-18 頁）と著者も述べる。そうであるならば、著者の枠組みはイギリスとカナダ・オーストラリアの関係に適用できるだけであって、帝国全体の構造ではないのではないか。種類のちがう植民地だから、異なる枠組みでかまわないということなのか。また、カナダ・オーストラリアと従属的な植民地との関係性はどうなるのか。場合によって、イギリス本国の帝国観・オーストラリアの枠組み・カナダの枠組みが都合よく使い分けられているようにも思われる。書評者は、本書の分析枠組みに敬服するだけに、著者がどのように帝国全体の構造を示すのか、より詳しい説明を求めたいのである。

今一点は、前述の問題とも関係するが、本書でしばしば現れる国家もしくはそれに関係するナショナリズムなどの語彙の問題である。イギリス本国のナショナリズムはわかりやすい。では、帝国への紐帯はやはりナショナリズムなのか。たとえば「祖国カナダ」という場合、まだ国民国家になる以前では、「国」とは何のことなのか、郷土といった意味なのか。英語でもネイションやナショナリズムということばは適当に使われがちだと思うが、これが日本語訳になると一層ややこしくなる。著者にのみ責任を負わせることができない問題ではある。しかし、本書が国民国家形成とナショナリズムの関係を扱う本である以上、どこかで「国」や「ナショナル」などという表現への説明がほしかった。

最後に書いておきたい。本書中、何度か政治外交史研究への批判がある。著者は、政治・外交の動きが社会の変化を促すと考えるような研究を想定している。しかし、近年の政治外交史は、コンストラクティヴィズム（構成主義）などの影響を受け、社会史に負けないほど、史料的実証や論理的位置づけが困難な記憶・心性・社会の雰囲気などを重視している。20 世紀のイギリス帝国の変容を多角的に論理づけた点、カナダの国旗論争やオーストラリアのアンザック追悼と王室の関係にかんする政治過程を描き出した点。著者の研究者としてのアイデンティティはともかく、本書は「新しい」政治外交史の名著にもなっている。私的な話題になって恐縮だが、書評者は著者がまだ学部生のとき最初に出会った。その頃からうかがえた歴史研究に対する真摯ではあるが柔らかい姿勢が見事に結実した。さあ、書評者も歴史学の可能性を広げるべく努力しよう。そう思わせてくれる著作である。

（酒井一臣）

根津由喜夫著
『ビザンツ貴族と皇帝政権
コムネノス朝支配体制の成立過程』

世界思想社、2012 年 2 月刊、A5 判、528 頁、
7000 円＋税、ISBN978-4-7907-1550-4

誠に遺憾ながら、ビザンツ宮廷の名物といえば陰謀とクーデター、と相場が決まっている。著者も引用しているが、我が国のビザンツ史学界を牽引してきた渡辺金一氏の言葉を借りれば、「ビザンツ千年の歴史のなかで、88 人の実際に統治行為を行った皇帝のうち、43 人を下廻らない者が革命で帝位をおわれ、そのうち 30 人は非業の最期をとげた」のである。実の親子や兄弟、親類一同を巻き込んでの泥仕合が繰り広げられることも少なくない。そして本書の舞台となっている 11 世紀は、対外情勢の不安も相俟って、ビザンツ史の中でも特に「11 世紀の危機」と呼ばれるほど混迷した時代であった。その実、1025 年から 1081 年の約 50 年の間に、13 人の皇帝が相次いで即位している。本書は、この時代の宮廷に渦巻く黒い陰謀とクーデターをドラマティックに描いた一冊、などではもちろんない。本書が目的とするところは、「新しい 11 世紀政治過程論を構築すること」である。著者は根津由喜夫、11-12 世紀の政治史と社会史を専門としている。では、著者の示す新たな政治過程論とは一体何か。まずは学説史を概観することからはじめよう。

ビザンツ史研究の中で、11 世紀はかつて、約千年の歴史の中期と後期を分かつ重要な転換期とされていた。この時代区分に決定的な役割を果たしたのは、20 世紀ビザンツ学研究の巨星、ゲオルグ・オストロゴルスキーである。彼は、ビザンツ帝国にまとわりつく負のイメージ、つまり、ローマ帝国の衰亡過程でしかないという言説を払拭し、中期のビザンツ帝国を、皇帝を中心として集権体制が敷かれた最強の中世国家として描き出した。しかし、オストロゴルスキーにとって 11 世紀は、繁栄を極めた国家体制が崩壊していく過程に他ならなかった。中期帝国の栄光と対をなすように、11 世紀以降の帝国にはネガティブなイメージが付与された。しかし、1970 年代から、こうした図式に批判が出され始める。その中で生まれてきたのが、貴族層を時代の推進者として再評価する学説であった。そして、貴族層に関心が及ぶにつれて、彼らの個別的な情報の集積を図るプロソポグラフィー研究が脚光を浴びるようになる。特に、ビザンツ・プロソポグラフィー研究は印章学と密接に連携をとることで、その情報量を飛躍的に増加させることに成功した。

本書はこの流れを追って、「新しい政治過程論」の構築を目的としているのである。これに対して、著者は以下のような課題を提示している。第一に、現時点で得られるプロソポグラフィー情報を十分に活用し、支配エリートの人的関係を精緻に探求することで、彼らの相互作用の中で醸成された政局変動のメカニズムを解明すること。そして第二に、この時代の貴族層が拠点を有していた地域社会とその内部構造、そして彼らが首都のコンスタンティノープルの政治勢力と取り結んでいた諸関係に留意し、この動乱の時代の政治過程を、帝国全域の住民たちの動向と関連付けながら分析すること、である。

本書の構成は以下の通りになっている。

序章　11 世紀ビザンツ政治過程論の射程
—課題と方法—
第 1 章　コンスタンティノープルの都市騒乱
—皇帝改廃劇のシナリオ—
第 2 章　ビザンツ軍事貴族の実像
第 3 章　ビザンツ貴族反乱の東と西
—11 世紀中葉の事例から—
第 4 章　イサキオス 1 世とコンスタンティヌス 10 世の治世をめぐって
—過渡期のビザンツ皇帝政権—
第 5 章　ロマノス 4 世ディオゲネスの「敵」
—マンツィケルトへの道—
第 6 章　ビザンツ領小アジアの解体
第 7 章　バルカンの反乱
第 8 章　アレクシオス 1 世の権力確立過程
—軍幹部構成と陰謀事件の分析から—

第 9 章　ビザンツ属州行政と名望家層
　　―コムネノス朝期のテッサロニケ地域を軸に―
第 10 章　コムネノス朝支配体制の存続
　　―アレクシオス 1 世没時の権力闘争を軸に―

全 10 章構成ということもあり、それぞれの章に十分な説明を付するのは困難だが、順を追って要点をまとめ、著者が示す新たな政治過程論を見ていこう。

第 1 章と第 2 章では、本書の基本的な前提となる情報が示されている。まず第 1 章では、11 世紀の政治情勢を分析することから、この時代の全体的な流れを把握することができるだろう。中でも注目されるのは、首都コンスタンティノープルを舞台にして繰り広げられた騒乱である。これらはしばしば政局を左右することさえあった。この時期、騒乱で中心的な役割を果たした首都の政治勢力は元老院、民衆、教会であった。そして、この三勢力を構成する裕福な市民層や聖職者、そして後に官僚となる文官貴族らは、首都の大学で共に教育を受けていた。こうして、彼らの間に網の目のような人的ネットワークが構築され、政治的行動に際して連携をとったのである。彼らは、地方で旗を揚げた反乱軍がコンスタンティノープルに迫ったとき、二通りの行動を取った。つまり、現皇帝支持か、あるいは反乱軍（対立皇帝）支持である。1047 年のレオン・トルニキオスの反乱は、首都の政治勢力が現皇帝支持に回ったために失敗に終わり、1057 年に起きたイサキオス・コムネノスの反乱は、彼らの支持を得て首都入城を果たし、成功を収めた。反乱が成功するかどうかは、首都の政治勢力の手に委ねられていたのである。

従来の定説では、11 世紀の政局の中心的存在であった貴族たちは、中央の文官貴族家門と地方の軍事貴族家門という二派に分かれて争った、という図式にあてはめられていた。しかし、プロソポグラフィー研究によって、このようないわゆる「文官派」と「軍事派」という単なる二項対立では論じきれないことが明らかになった。というのも、「文官派」政権における軍事官職を全て文官貴族でまかなうことは困難であり、また「軍人派」政権でも文官貴族家門出身者が重要なポストを占めていたことが判明したのである。多くの論争を引き起こしたこの文武二類型論に対して著者自身は、「文官」と「軍人」という概念規定の存在はいまだ有効であるが、両者の垣根は低かったとする立場に立っている。このような前提に基づいて第 2 章では、各地で反乱軍を立ち上げて首都へ進撃し、時には政権を奪取した軍事貴族家門の具体的特質が、プロソポグラフィー研究の成果を用いて実に詳細に分析されている。

第 3 章以降は、11 世紀中葉の政治過程論に議論の中心が移る。まず第 3 章では、この時期の政治的混乱を象徴する二つの反乱、つまり先に述べたレオン・トルニキオスの反乱とイサキオス・コムネノスの反乱が取り上げられている。それぞれの反乱に至る過程、そして反乱参加者の構成を分析することで、帝国の西側バルカン属州と、東側小アジア社会の形質の相違を浮き彫りにし、また反乱成功に決定的役割を果たした首都内部の動向にまで言及している。それらを簡略にまとめると、以下のようになる。レオン・トルニキオスが指揮した反乱軍は、西方幹部層の不満分子を集めた相対的に小さい地域的結合でしかなかったのに対し、イサキオス・コムネノスの反乱軍は小アジア社会に確固たる支持基盤を築いていた複数の有力家門が勢威を結集し、広い地縁的まとまりをもっていた。さらに、後者は、現皇帝と対立した首都の政治勢力による騒乱によって、無事に首都入城を果たすことができたが、前者の時にはそれが起こらなかったために、反乱は失敗に終わった。反乱を成功させるためには、首都内部の政治勢力の呼応が必要条件だったのである。

続く第 4 章と第 5 章では、1057 年から 1071 年までの間に権力の座に就いた 3 人の皇帝の苦闘ぶりが論じられることになる。まず第 4 章では、イサキオス 1 世コムネノスとコンスタンティノス 10 世ドゥーカスの政権を比較検討することによって、過渡期のビザンツ国家像が明らかにされている。従来、軍人上がりの前者と、高官出身である後者の比較は、文武対立史観の典型として理

解されてきた。しかし、著者によれば、好対照をなす両者の姿は、単に「軍人」と「文官」の差に帰されるのでは決してない。前者が、国家財政の再建と軍事強化を図って改革を断行する一方で、親族さえ遠ざけて普遍的な絶対権力者としての皇帝像を描き出したのに対し、後者は自身を取り巻く勢力に爵位を分配して、「ドゥーカス家」への権力集中を画策した。著者は、それぞれの政権の構成員を一覧表にして比較考察することにより、両政権の人的関係に支えられた権力構造を明らかにした。

第5章はロマノス4世ディオゲネスの治世に当てられている。ビザンツ帝国の栄光の終焉と目されてきた歴史的敗北、つまり1071年のマンツィケルトの戦いでの敗北について、皇帝をこの不必要な決戦に駆り立てた内的要因である国内政局の推移を明らかにすることが目的だ。このようなアプローチはこれまでにも見られたが、本書では、近年のプロソポグラフィー研究の成果が活用されている点に意義が見出せるだろう。ロマノス4世が登場する背景から、政権の構成員までを分析した結果、軍事的功績を挙げ続けなければ、帝位を存続できないというような、逼迫した情況をうかがい知ることができる。そして何より、この戦いの後に起こった帝位をめぐる内乱によって、トルコ人の侵入が加速し、帝国の小アジア支配は解体の一途をたどるようになる。次章からは舞台をコンスタンティノープルの政局から地方へ移し、それぞれの社会が抱えた問題について考察される。

内乱を制して帝位に就いたミカエル7世ドゥーカスは、小アジアの統治策として、地方の有力者たちを、彼らの本拠地近くの属州長官に任命して防衛に当たらせた。この結果、まったく容易に想像できることだが、地方に地盤を持つ有力者たちは、次第に自立傾向を強め、帝国各地に独自の分権的な政治勢力が出現した。第6章では、この時期に小アジアで起こった3つの地方勢力反乱を比較検証し、それぞれの地域が抱えた問題と、ビザンツ支配体制が解体に向かった状況を浮かび上がらせている。首謀者はそれぞれ、アルメニア貴族出自と目されるフィラレトス・ブラカミオス、フランク人傭兵のルーセル・ド・バイユール、そして軍事官職を歴任したニケフォロス・ボタネイアテスである。フィラレトスは、首都へは向かず、小アジア東南部を次々と侵略して独自の領国を築き、ルーセルも小アジア北東部アルメニアコイを支配し、一時は首都を目指す動きも見せた。そしてボタネイアテスがついに、ミカエル7世を廃して、政権を奪取することに成功した。これらの反乱はそれ自体もビザンツの支配体制に影響を及ぼしたが、さらに深刻な結果をも招くことになる。特にルーセルのような地域支配者は、現地住民との相互関係によって属州防衛システムを構築し、トルコ人を撃退していた。しかし、反乱鎮圧を任された皇帝軍こそが、皮肉にもそのシステムを破壊することになったのである。守護者をなくした当該地域は加速度的にトルコ人の侵入を受けることになった。こうしてトルコ人が占領した都市に、ビザンツ当局は何ら有効な手段を持てずに、帝国の小アジア領が解体していったのである。

一方、これまで比較的平穏であった西方属州にも、1070年代後半から反乱の火の手が上がった。ニケフォロス・ブリュエンニオス、ニケフォロス・バシラキオス、そしてアレクシオス・コムネノスによる3つの反乱である。第7章ではこれらが比較検討されている。ここで特に言及すべきは、アレクシオス・コムネノスについてであろう。「11世紀の危機」に終止符を打ち、100年にわたる安定した政権、コムネノス朝を樹立した開祖アレクシオス1世その人である。彼は、ニケフォロス3世ボタネイアテスによって軍司令官に任命され、先の二つの反乱鎮圧を通じて帝国軍兵士から絶大なる信頼を得ていた。また、彼の政権奪取の過程で最も特異性が際立っているのは、コンスタンティノープルを独自の軍事力で制圧したことである。首都の政治勢力の協力を得ずに即位を果たしたことによって、彼らの顔色を窺うことなく、強硬な政策を実施することに成功した。

こうして帝位に就いたアレクシオス1世は、どのようにして権力を確立したのか。第8章では主に、彼の在位中に起きた二つのノルマン戦役における人員配置を分析することによって、政権の権

力基盤が明らかにされている。それによって得られた情報は以下の通りである。同帝による政権奪取から間もない時期には、信頼のおける親類一族が周囲を固めていた。しかし治世後期には、即位後に皇族に加わったバルカン貴族や新興家門が台頭し、重要なポストを与えられた。これは、政権の外部にあった有力門閥と婚姻を結んで彼らを体制内に加えることで、政権の裾野を広げることに成功したからだと著者は指摘している。また一方で、在位中に起きた二つの陰謀事件によって、コムネノス家直系以外の有力な後継者と古参の軍幹部層も一掃された。かくして、アレクシオス 1 世は、巧みな政治手腕で有力家門の影響力を削ぎ、「コムネノス一門」という大きな体制による支配を築き上げたのである。

コムネノス朝が安定した要因の一つである属州行政についても考察する必要があるだろう。それを扱うのが第 9 章である。従来、コムネノス朝は、次のような図式によって説明されてきた。つまり、皇帝から所領を与えられた「コムネノス一門」の構成員らが「封建貴族」化したことによって、中央集権体制が崩壊したというものである。しかしそれならば、地方に基盤を持った彼らが属州で大規模な貴族反乱を起こさなかったことが疑問に残る。著者は、この疑問に対して以下のように答えている。「一門」の貴族らは、属州の総督職にあったが、短期間で任地を交代させられたため、地方に基盤を持つこともその地に定着することもなかった。実際に統治にあたっていたのは、「一門」の私的従者層である文官貴族らであり、彼らが首都の皇族と在地名望家層との媒介を果たすことで、安定した属州統治機構が成り立っていたのである。

最後に、アレクシオス 1 世の権威が息子のヨハネス 2 世へと引き継がれる過程を語って、本書の幕は閉じられる。というのも、この過程を分析することによって、コムネノス朝支配体制の本質とその問題点が浮かび上がってくるのである。皇帝の即位後に誕生した「緋産室生まれ」の男子として、帝位継承に絶対的な地位を持つヨハネス 2 世の即位には、一見何の問題も見当たらないのだが、実際にはそうではなかった。皇后エイレーネーと長女のアンナが反対し、対抗馬を立ててヨハネスを追い落とそうとしたのだ。コムネノス朝の支配体制では、血縁と婚姻関係で結ばれた「コムネノス一門」の貴族集団を、絶大な統率力を誇る皇帝が主導することが基本原理であった。皇帝との血縁・婚姻関係の近さがそのまま爵位の序列に相当し、皇帝を頂点としたピラミッド構造に権力が収斂していたのである。皇帝周辺の人的ネットワークが前提となるこの体制においては、皇帝自身の人望や個人としての資質が重要であり、皇帝交替時に問題が起きるのであった。しかし、別の家門出自のものが新しい皇帝に名乗り出ることが困難であるのは確かであり、帝位交替時の危機さえ乗り切れば、巧みに永続しうるメカニズムを備えていたのである。このように述べて、本書は結ばれている。

本書に目を通して第一に感じるのは、その情報量の多さである。著者は、11 世紀の間に次々と起こる反乱や戦役、そして陰謀事件に際して、その関係者をリストアップし、彼らの出自やそれぞれが抱えた個人的な問題にまで言及している。そうして浮かび上がってくるのが、従来の型にはまった図式を見直す「新しい政治過程論」であり、これこそまさに、日々進展を続けるプロソポグラフィー研究の成果であろう。しかし、瑣末なことながら、気になる点がいくつかある。

第一点目は、分析対象についてである。本書全体を通して、考察の主たる対象となっているのは、軍事貴族家門の者たちだ。それは、11 世紀を通じて政局推移の主役を演じたのが彼ら軍事貴族だからであり、そこに議論が集中するのは当然の帰結かもしれない。しかし、最初に著者も述べているように、軍事貴族政権においても、文官貴族が政権運営の重要なポストを担っていたのは確かなはずである。イサキオス 1 世からニケフォロス 3 世までの政権下で、彼らはいかなる役割を果たしたのか。「軍人」と「文官」という二類型を真っ向から否定せず、そのような貴族類型の存在を認めるならば、後者についてももう一歩、詳細な情報が欲しいところである。

第二点目として、外交関係について、いま少し紙幅を割いても良かったのではないかと思われる。国内政局の推移を論じる上では、その時々の外国勢力との関係も、重要な鍵になるのではないだろうか。例えば、評者が疑問に感じた箇所として、ロマノス4世がマンツィケルトの決戦へ向かった要因についての問題がある。この時、権力回復を狙うドゥーカス家と皇帝の間に熾烈な対立があったことは確かだろう。軍事的功績を挙げ続けることが、皇帝権の存続と等しかったことも納得できる。しかし、それが直接の要因になり得るだろうか。見たところ、ロマノス4世には十分な軍事的才能があり、この戦いにも勝算はあったように思われる。敗北はあくまで結果論であり、緊迫した政局の情勢に駆り立てられたからとは言い難い。ビザンツ帝国には、実に悪名高い伝統的な外交戦術があり、皇帝はこの時も、トルコ側と何らかの交渉をもっていたのではないだろうか。帝国の栄光の終焉というべき戦いならなおさら、そうした視点からも見てみたい問題であるように感じられた。

また、後期のビザンツ帝国を語る上で避けては通れない問題である十字軍が始まったのも、アレクシオス1世時代であり、本書の対象とする時期であるはずだ。同帝の治世を記録する重要な史料である、アンナ・コムネナによる『アレクシアス』にも、もちろん第1回十字軍の様子は描かれている。コンスタンティノープルで集結し、小アジアを横断していった十字軍との関係は、コムネノス朝期の大きな不安材料であり、王朝の属州支配や政局にも影響したのではないだろうかと思われる。

最後にもう一点付け加えるとするならば、本書には結論部に当たる終章が配置されていないことにも、わずかな疑問を覚える。これまで繰り返し述べてきたが、著者の意図は新しい政治過程論の構築であるはずだ。しかしそれならば、本書で述べられてきた政治過程とは一体どのようなものだったのだろうか。そして分析の結果として、11世紀とはどのような時代だったと言えるだろうか。もちろん、個々の分析を通じて従来の説の見直しが図られ、新たな事実が浮かび上がってきたことは疑いようがない。しかし、その先に何が見えたのか、結論として今一度、それが明示されているとより一層、著者の意図が掴みやすかったのではないかと感じられる。

以上、とても全体を俯瞰できたとは言い難いが、本書の内容を紹介し、拙評を述べさせて頂いた。重箱の隅をつつくような指摘ばかり重ねたのではないかと恐れているが、著者の胸を借りる気持ちで臨んだ次第である。若輩者へご宥恕をお願いしたい。そして、本書で示されたプロソポグラフィー研究の成果を用いた莫大な量の考察には、全く驚嘆するばかりであった。この功績が、今後のビザンツ史研究に多大なる貢献を果たすことは間違いないだろう。

（權野友里江）

與那覇潤著
『中国化する日本
日中「文明の衝突」一千年史』

文藝春秋、2011年11月刊、四六判並製カバー装、320頁、1575円（税込）、ISBN978-4-16-374690-6

書評には2つのタイプがある。その対象となる書籍に限定して言及するものと、書籍を契機として書評者なりの見解を述べることに主眼が置かれるものである。與那覇潤氏による本書は日本通史の講義をもとに書かれた一般向けの歴史書であり、本来であれば西洋史を中心に扱う本誌で書評すべき対象ではないかもしれない。しかし敢えて、一般読者向けに平易な文章で書かれ版を重ねている本書を手掛かりに、歴史学という学問が一般社会（the Public）にどのように関係していくべきかという、本誌の創刊の辞でも述べられた観点から、後者のタイプの書評を試みたい。そのためには、まず前提として本書がどのような本であるかという事を明らかにしておく必要があるだろう。現代との比較に基づく比喩的レトリックや、小説・映画を始めとするフィクションを駆使しての説得的な叙述に富むため容易ではないが、構成に即して

本書の要約を試みたい。

まず「はじめに　新たな歴史観としての「中国化」」において、表題にもある「中国化」という著者独自の概念が提示される。この「中国化」とは、その挑発的な見かけから想像されるような現代政治的な概念でも、遣唐使やシルクロードで語られる日中交流史的な文脈に位置づけられるべきものでもなく、世界で最も早く近世（初期近代）化した宋朝中国で導入された社会システムと類似した姿に日本社会が変質することと定義される。また、本書における「中国化」は、ある種のグローバル化として位置付けられていることを付言しておく。

「第 1 章　終わっていた歴史――宋朝と古代日本」では、まず現代のグローバル社会に通じる画期的な社会が宋朝において現出していたことが確認される。その画期性は、内藤湖南の「宋代以降近世説」に基づいて、「貴族制度を全廃して皇帝独裁政治をはじめたこと」、すなわち「経済や社会を徹底的に自由化する代わりに、政治の秩序は一極支配によって維持するしくみを作ったこと」とされる。そのしくみを支えた科挙、郡県制、青苗法による貨幣経済の浸透などによって、皇帝以外の身分制・世襲制の撤廃、移動・営業・職業選択の自由が広がり、「自由と機会の平等」が達成されたとされる。このような新自由主義的な社会を生き抜くために、宋朝中国の庶民はセーフティ・ネットとしての父系血縁ネットワーク「宗族」を発展させ、他方、皇帝・科挙官僚たちは自分たちの支配を正当化するために理想主義的な朱子学を採用したとされる。他方、科挙を実施できるほど成熟していなかった日本は、中国とは異なる発展を遂げることとなる。すなわち、荘園制と物納系税に立脚した貴族が官位の家職・家産化を進め、さらには荘園制社会の維持を目指した「反中国的」勢力である源氏が、貨幣経済などの宋朝の仕組みを導入しようとした革新的な後白河法皇・平氏勢力を破って、日本独自の封建的社会の道筋をつけたとされる。

「第 2 章　勝てない「中国化」勢力――元・明・清朝と中世日本」では、中世日本で「時々だけ中国に似た政権が樹立されるのだが、おおむね短命に終わる」様態が確認される。元寇期以降の日本には、グローバル国家モンゴルにより国内での使用を禁じられた銅銭が大量に流入し、社会経済的な混乱が生じたことが述べられる。この混乱に乗じて、後醍醐天皇が、悪党をはじめとした漂泊民・商工業者を組織し、農業基盤に依拠する武家勢力を打倒し、公家社会の家格・先例を無視し、独自の貨幣発行を計画したとされる。これらの後醍醐天皇の政策に、前章で述べられた「中国的」性格が認められるとの主張がなされる。これと同じ文脈に、有力御家人を粛清して集権化を進めた足利義満も位置づけられる。他方、中国では「反グローバル勢力」明による一時的な揺り戻しはあったものの、外来王朝である清朝によって社会の「中国化」が徹底されたと述べられる。

「第 3 章　ぼくたちの好きな江戸――戦国時代が作る徳川日本（17 世紀）」では、戦国時代以降が「中国的な社会とは 180 度正反対の、日本独自の近世社会のしくみが定着した時代」と位置付けられ、現代にまで繋がる地縁的社会、国民国家、象徴天皇制、無思想性・無宗教性といった社会的特徴が成立したとされる。これらが定着したとされる江戸時代が身分制社会として安定的に確立した背景として、稲作の普及による食糧事情の改善が指摘される。この社会の安定に寄与するイエ制度が、村請制・家職制や封建制という形で日本独自の「江戸時代」的な社会を形成し、「中国化」への防波堤として機能していくことが述べられる。

「第 4 章　こんな近世は嫌だ――自壊する徳川日本（18 世紀）」では、現代にも通じる江戸時代の歪な社会像が描かれる。第一に、家産を分割しない社会制度のもと、跡継ぎでない次男以下が農村から都市へ出て、厳しい生存競争にさらされていたことが述べられる。第二に、「身分が上のものが名を取る分、下のものが実をとる」という意味で「地位の一貫性が低い」身分制社会が江戸時代の特徴であったと述べられる。このような社会において蓄積された不満が、幕末の動乱の一因として位置付けられる。

「第5章　開国はしたけれど――「中国化」する明治日本」では、まず新しい明治維新像が提示される。黒船の襲来という軽微な切欠から生じたこと、攘夷を目指したはずの討幕派が新政府になるとあっさり開国を是認するという場当たり的な対応を行ったこと、人的被害も軽微であったということが確認され、これらの観点から「江戸時代」は外因によって終わったのではなく、前章で述べられた内発的な要因によって終焉を迎えたと述べられる。このようにして生じた明治政府によってもたらされた変化は、極めて「中国化」的であるとされる。その特徴としては、①儒教道徳に依拠した専制王権の出現（政治システムの一元化、教育勅語など）、②科挙制度と競争原理の導入（高等文官任用試験など）、③世襲貴族の大リストラと官僚制の郡県化（廃藩置県、秩禄処分など）、④規制緩和を通じた市場の自由化の推進（地租改正、土地売買の公認、身分制廃止による職業選択の自由化、官有事業の払下げなど）が挙げられる。また、既に近世的な形で「中国化」を完遂していた中国・朝鮮では西洋的近代化の機を逸したのとは対照的に、明治日本が近代化に成功したのは、たまたま西洋的近代化の必要な時期に「中国化」も実行したからであるとの主張が展開される。他方、この急激な変化に対する反動の事例として、士族の反乱だけでなく、自由民権運動が位置付けられる。明治中期以降になると、このような「反中国化」「再江戸時代化」の流れが大勢を占めるようになる。その流れの中で、議院内閣制でないのに「協賛」権を持つ議会、大臣の罷免権を持たないためにリーダーシップの弱い首相といった責任の所在の明らかでない政府が、「中国化」と「再江戸時代化」双方の折衷的な形で成立したとされる。

「第6章　わが江戸は緑なりき――「再江戸時代化」する昭和日本」では、第一次世界大戦の頃から、会社別組合の導入、終身雇用・年功賃金の整備による会社の「村社会化」が、「新しい江戸時代」をもたらしたと論じられる。更に、この「再江戸時代化」の時期が、第一次世界大戦後の「江戸時代」的な社会主義が顕著となった世界趨勢と期せずして一致していたと述べられる。その上で、明治維新による「中国化」の試みは、「江戸時代」的な社会主義である軍国主義の流れによって挫折させられたと主張される。

「第7章　近世の衝突――中国に負けた帝国日本」では、「中国化」と「江戸時代化」の観点から第二次世界大戦の再解釈が行われる。その解釈とは、帝国日本は、その支配を貫徹するために「中国化」していた東アジアの「江戸時代化」を試みたというものである。戦略拠点が限られており「例外的に江戸時代に近い経済や社会の構造」をもっていた満州で成功を収めた日本軍は、同じ戦略に基づいて中国大陸の他の地域に挑んだために敗戦に至ったと主張される。対する中国は、蒋介石も毛沢東も「中華の伝統たるグローバルな正戦論で、日本の江戸時代型軍事動員を凌駕し」た結果、日本は「アメリカに負ける前に中国に負けていた」と論じられる。その一方で、日本では「東亜協同体」「大東亜共栄圏」といった政治理念・権力の部分に限って、「中国化」が蘇ったことが付言される。

「第8章　続きすぎた江戸時代――栄光と挫折の戦後日本」では、戦後に「再江戸時代化」していた社会経済と「中国化」していた政治理念とがどのように接合されたかが論じられる。社会経済政策が戦後復興の課題であった段階では、社会主義勢力による政権は国家社会主義的軍部から議会政治家に担い手を代えて継続していた。しかし、朝鮮戦争が勃発して再軍備・憲法九条といった政治的正否が問題となる「中国化」的な状況になると社会主義勢力は政権を失い、これに代わって自由民主党が政権を握る55年体制が続いたことが示される。この「政権選択では常に自民党が勝ち、憲法論争ではいつも社会党が勝つ」という地位の一貫性の低い「江戸時代的な」政界の構図と憲法九条といった「中国化」的な政治理念とが折衷されたのが、戦後民主主義であったとされる。この体制は田中角栄による「再江戸時代化」的な「国土の均衡ある発展」路線によって補強されて中選挙区制に支えられた「長い江戸時代」が日本で継続される一方、第四次中東戦争以降、世界は「中国化」的な「新自由主義」に転換したことが述べられる。

「第 9 章　「長い江戸時代」の終焉――混乱と迷走の平成日本」では、55 年体制の崩壊が「中国化」の文脈で語られる。細川内閣によって導入された郡県制的な小選挙区制によって、「長い江戸時代」は終焉を迎えるものの、政局は「江戸時代化」と「中国化」のどちらにも軌道が定まらぬままであったとされる。例外的に長期政権となった小泉内閣だけが世界の趨勢を占める「中国化」（「グローバル化」、「新自由主義」）に順応したことが指摘される。

「第 10 章　今度こそ「中国化」する日本――未来のシナリオ」は、日本の「中国化」を歴史的必然とみる立場から、日本の今後を予見しようという試みである。これまで「中国化」を食い止めてきた封建的「再江戸時代化」が弱体化した現在において、予見される社会保障としてベーシック・インカムが挙げられる。最後に、人口減少社会の日本への対応策として外国人移民の受け入れと、「儒教」「社会主義」といった理想主義的政治理念を放棄した中国に、日本から憲法九条という正否が問題となる「中国的」な政治理念を受け入れるように提起することが日中友好のために必要であると述べられる。

「おわりに　ポスト「3・11」の歴史観へ」では、東日本大震災と福島第一原発事故という強烈な事件以降も、「長い江戸時代」の後に続く「中国化」が進行しているという事態には変化が無かったことが確認される。

以上が本書の些か歪な要約である。その歪さの要因として第一に挙げられるべきは、当然ながら書評者の能力不足であるが、それとは別に指摘しておかなくてはならないのは、冒頭で述べたように、一般読者にとって理解の助けとなる比喩的レトリックと縦横無尽に活用されているフィクションの存在である。これらの点は本書の大きな特徴ではあるが、要約という無味乾燥な作業とは基本的に相容れないものであり、書評者としては本書に実際に目を通していただく事を願うのみである。皮肉の利いた論調ともども、聊か外連味はあるが大変読みやすい文章である。また極めて現代的にすぎる比喩表現が論旨に強い説得力を与えている一方で、それ故に、ここ数年で古びてしまうことが懸念される。これらの本書の特徴は一般読者には魅力的であるが、ややもすると専門的な歴史研究者からは素直に受け入れ難いものかもしれない。また一般書であるがために、論理的証明よりも説得的説明という側面が際立っているかのように見える憾みもある。しかしながら、この問題については、著者が述べるように「一般書としてはかなり丁寧に記述内容の出典表記をつけて、興味の惹かれたテーマについてはどんどんオリジナルの研究に当たってもらえるよう、工夫」（21 頁）が施されており、十分に補完されている。更なる証明を著者に求めるならば、299 頁で刊行が予告されている「上級編」的論文集の刊行を待つべきであろう（専門を異にする筆者には、批判どころか理解すら覚束ないという意味で、到底手におえない著作であることは間違いない筈であるが）。

さて以後、専門外の気楽さから、本書について指摘を数点行った後に、書評者なりの見解を提示したい。

まず『中国化する日本』という挑発的な表題についてであるが、この表題にも拘らず、本書で実際に描かれている日本は、なかなか「中国化」せず、独自の「江戸時代」路線を長く歩んできている。一時的に「中国化」したように見えても、平氏政権期、後醍醐天皇期、足利義満期、明治初期のいずれの「中国化」の展開も短期的なものでしかなく、精々が「中国化」と「江戸時代化」との折衷的な状態に留まっている。恐らく、この表題は歴史書としてのものではなく、これから「中国化する日本」をグローバル社会に適応するのが下手な日本人が生き抜くために理解しておくべき、日本社会の来し方を知るための「診断書」としてのものなのであろう。そのような意味で、本書は個別の史実からの裏付けによって構築された歴史学の本というよりも、「中国化」「江戸時代化」といった概念モデルに基づいた歴史社会学の本と見るべきかもしれない。このように述べたからと言って誤解して頂きたくないのは、このようなラベリングによって本書の価値を損ないたい訳ではないという事である。この点については後で述べることとしたい。

また、平安末期から現在までという長期間にわたる多くの事柄に「中国化」「江戸時代化」という概念を当て嵌めている本書は、その性質上、些か自己撞着的な論理展開に陥っているようにも見え、今後、その論旨は歴史学的に検討されるべきものであろう。本筋を外れた細かい記述について一例を挙げれば、16 世紀の価格革命と 18 世紀以降の産業革命とを直接的に結び付ける「「銀の大行進」がヨーロッパにもたらしたのが、かの有名な産業革命です。」（66 頁）のように、違和感を覚える記述も無い訳ではない。恐らく同じように歴史学的精密さに問題が有るとされうる事例は他にも有り、書評者の専門外であるため、その多くが見過ごされているというのが実情であるように思われる。しかしながら、その論によって従来とは異なる日本史像を提示しているという意味においては、大変有益なものであるといえよう。

さて以下、本書を踏まえた書評者の見解を述べることとする。書評者の専門は古代ローマ史であるので、近年盛んな西洋近現代史の蓄積を踏まえたグローバル・ヒストリーの展開については、これまで些か距離を置いた立場から傍観してきた。その無責任な立場からの素朴な疑問として浮かんだのは、本書で述べられる「中国化」というグローバル化と西洋近現代史的背景を持つ「グローバリゼーション」とは接点を持ち得るのだろうかという問題である。羽田正氏が『新しい世界史へ――地球市民のための構想』岩波新書、2011 年で提示したような多様な歴史解釈が併存する可能性という問題を踏まえるならば、両者は方法論的アプローチの違いを超えて、共鳴する可能性があるのではないだろうか。

本書の上梓後、與那覇氏は歴史学以外の分野との対話を積極的に進めており、その一端は経済学者・評論家の池田信夫氏との共著『「日本史」の終わり――変わる世界、変われない日本人――』PHP 研究所、2012 年という形で結実している。歴史学と他分野の架橋となっている與那覇氏の著作を狭義の歴史学の枠を超えたものとして梯子を外してしまうのではなく、歴史解釈の幅を広げるという意味と一般読者への浸透という意味の両方の意味で、歴史学の裾野を広げるために西洋史学の立場からも積極的な対話を試みるべきではないだろうか。書評者は一般読者に近い立場から、その結果、どのような化学変化が起こるのか楽しみでならない。

（鷲田睦朗）

新刊紹介

秋田茂著
『イギリス帝国の歴史
アジアから考える』

中央公論新社、2012 年 6 月刊、新書判、312 頁、
880 円＋税、ISBN978-4-12-102167-0

本書は、イギリス帝国史・グローバルヒストリーを専門とする著者による、18 世紀から 20 世紀、そして現代へと至るイギリス帝国の歴史を概観し、その歴史的意義を考察しようという試みである。北西ヨーロッパの島国イギリスは、17 世紀以降徐々に海外進出を進め、19 世紀にはヨーロッパでも最大の植民地帝国を形成した。このイギリス帝国の歴史的意義をめぐって、これまでにも多くの議論が行われてきた。本書は、このような議論を踏まえ、最新の研究成果を紹介するとともに、アジア諸国の急速な経済発展という現在の世界情勢を背景にして、「アジアから考える」イギリス帝国という、新しい観点を提示している。以下、各章の内容を簡単に紹介していきたい。

序章「現代アジアの経済的再興とイギリス帝国」において、著者はまず、世界の GDP の変容を通して、現代の世界に「アジアの経済的再興」と呼べる変化が起きていることを示す。著者は、このような変化の背景には、中国やインド、東南アジア諸国などの急激な経済発展があると述べ、その中でも特にインドを事例にしてアジアの経済成長の実態を明らかにしている。現代インドの経済成長を牽引する企業は、イギリスによる植民地支配のシステムを利用する形で 19 世紀末ごろから成

長してきていた。こうした例にみられるように、イギリス帝国には、植民地を支配・搾取したという側面だけではなく、多様な人種の人々に活躍の舞台を提供したという側面も存在していた。著者は、本書において、このような「利用されたイギリス帝国」の実態を考察する中で、帝国をめぐる様々な相互作用と関係性を明らかにしていきたいと述べている。

第 1 章「環大西洋世界と東インド――長期の 18 世紀」では、形成・発展と再編の時代に当たる 18 世紀のイギリス帝国の歴史が論じられている。17 世紀にアイルランドを事実上の植民地としたイギリスは、そこを足がかりとして大西洋へ進出し、カリブ海植民地に広大なプランテーションを建設していった。これを基盤に「大西洋三角貿易」が形成されていく。奴隷制に支えられ、砂糖やタバコを本国にもたらしたこの貿易を通して、植民地と本国の関係は緊密になっていき、環大西洋世界は 18 世紀のイギリス帝国を支える重要な役割を果たすことになった。

東に目を転じると、イギリスは 17 世紀初頭に設立した東インド会社を担い手としてアジア貿易を展開した。インド産綿織物や中国産の茶などが盛んに輸入され、アジア貿易は急速に拡大していく。さらに、東インド会社による貿易だけではなく、同社の社員や、インド在住のイギリス系自由商人（カントリー・トレーダー）による、アジア域内貿易が帝国にとって大きな役割を果たしていた。特に、中国に対するアヘンの輸出を担ったのはカントリー・トレーダーであり、18 世紀後半以降の「アジア三角貿易」の形成とイギリスによる中国茶の輸入急増に大きく貢献していた。

本章の最後で著者は、イギリス産業革命について、産業革命はイギリス一国史の文脈にとどまる問題ではなく、地球的規模でのヒトの移動や貿易ネットワークの構築という文脈で捉えるとともに、アジア側からの見直しも不可欠であると述べている。

第 2 章「自由貿易帝国とパクス・ブリタニカ」では、ヘゲモニー国家として世界に圧倒的な影響力を行使した 19 世紀のイギリス帝国について論じている。対仏戦争を勝ち抜いたイギリスは、軍事的・経済的な優位を確立するとともに、重商主義を排して自由貿易体制へ移行していく。奴隷制の撤廃、東インド会社の独占権廃止、航海法の撤廃などの政策によって、イギリス帝国は重商主義的な「第一次帝国」から、自由貿易に支えられる「第二次帝国」へと、ゆるやかに移行していくことになる。

19 世紀のイギリス帝国の特徴に関して、著者は自由貿易帝国主義論とジェントルマン資本主義論を紹介し、公式の領土として支配した地域にとどまらないイギリスの経済的影響力の世界規模での広がりや、19 世紀後半以降のイギリス帝国にとっての金融・サーヴィス部門の重要性、そしてその中でインドが特に大きな役割を果たしていたことなどを論じている。

さらに著者は、19 世紀のイギリス帝国を、自由貿易体制に代表される、「国際公共財」を提供するヘゲモニー国家であったと定義する。イギリス帝国が提供した国際公共財は、対価を払えば誰でも利用することができるという性質があった。この点に関して、著者はアジア諸地域が自由貿易体制を利用してアジア地域間での貿易を発展させ、対欧米貿易を上回る成長率を達成していたと述べている。さらに、イギリス帝国の「ジュニア・パートナー」となっていた日本を例に挙げて、東アジア地域の工業化とロンドン・シティの金融利害とが共存しながらともに発展していったと指摘している。

第 3 章「脱植民地化とコモンウェルス」では、解体と影響力の相対的な後退の時期にあたる 20 世紀のイギリス帝国について論じている。第一次世界大戦を経たイギリス帝国は、政治・軍事的影響力に比べて、シティを中心とする金融・サーヴィスに代表される経済面での影響力の重要性が増大していく傾向にあった。1930 年代にはスターリング・ブロックが形成され、イギリスの国際的影響力が後退したとされるが、著者によると、この時期にもイギリスはシティの金融利害を基盤として大きな影響力を行使する「構造的権力」として、国際政治経済秩序において不可欠な存在であった。

イギリス帝国における脱植民地化を決定づけた

のは、第二次世界大戦であった。特にインドは、二つの戦争を経てイギリスに対し莫大な債権（スターリング残高）を累積させ、それが独立の大きな要因になった。一方、1947 年に独立した後のインドはコモンウェルスに残留し、イギリスが国際的影響力を維持するための機構としてのコモンウェルスの価値を高める結果につながった。また、アジアにおけるスターリング圏は、コロンボ・プランを通して東アジア諸国の復興・経済発展を支援したという点で重要な役割を果たしていた。

1956 年のスエズ戦争における敗北以降、脱植民地化の流れはさらに加速し、東南アジアやアフリカの植民地が相次いで独立した。イギリスが「スエズ以東」から撤退した後の東・東南アジア諸国は、「開発主義」政策を進め、「東アジアの奇跡」とも呼ばれる急速な経済発展を始めた。そして、1997 年に香港が中国に返還されると、アジアにおけるイギリスの植民地の歴史に終止符が打たれた。

終章「グローバルヒストリーと帝国」では、近年急速に研究が進む、一国史を超える試みである「グローバルヒストリー」と、そのキー概念である「比較」と「関係性」について紹介した上で、本書で考察したイギリス帝国の歴史は、グローバルヒストリーへの「ブリッジ」として位置づけられると結論付けている。

本書の大きな特徴は、イギリス帝国と世界の諸地域、特にアジアとの関係性を論じていく上で、徹底してアジア側のプレゼンスや「主体性」を重視している点である。従来のイメージでは、17-18 世紀 におけるヨーロッパ人の進出以降、アジア諸地域はヨーロッパの支配下に置かれ、経済的搾取を受けて低成長にあえいでいたと見られてきた。本書は、このようなイメージを根底から覆している。18 世紀の時点においても、アジアはヨーロッパ人から見ると「豊かなアジア」であり、アジア産品の対価となる商品を持たなかったヨーロッパ人は、アメリカ大陸産の貴金属を輸出するしかなかった。また、貿易の利益を拡大させるためにはアジア側の貿易ネットワークに参入し、それを利用するという方法を取らざるを得なかった。18 世紀においては、アジア側がヨーロッパ側に対して明らかに優位に立っていたのである。

著者のこのような見方は、ヨーロッパ側のプレゼンスが増大する 19 世紀になっても一貫している。それが顕著に表れているのが、日本郵船のボンベイ航路とアジア間貿易との関係を論じた部分である。ここで著者は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、インド産の原棉のアジア内消費がヨーロッパへの輸出を大きく上回るようになったことを指摘している。通説では、植民地化以降のインドはイギリス綿工業に対する原料供給地となったとされてきたが、実情は大きく異なっていた。ヨーロッパ、特にイギリスの圧倒的な影響力が行使された 19 世紀でさえ、アジア域内貿易は対ヨーロッパ貿易以上に成長していたのである。このような 19 世紀におけるアジア経済のしたたかな成長を理解した上で、現代アジアの急速な経済発展を捉え直していく必要があるのではないだろうか。

最後に、今後の課題と展望について述べておきたい。著者は「アジアの経済的再興」について、コロンボ・プランとアジア諸国の経済発展との関係という観点から論じているが、現在進行中の問題であるということもあり、「経済的再興」の全体的な研究はまだまだ不十分である。「経済的再興」を果たしたアジア諸国の中にも、イギリスから独立してコロンボ・プランによる恩恵を受けた国々の他に、共産主義体制から改革開放に転じて経済成長を成し遂げた中国、分断から戦争を経て統一後成長を遂げたベトナムなど、多種多様なパターンが存在する。これらの国々の経済成長を理解するためには、長い間維持されてきたアジア間でのネットワーク、イギリスやフランス、オランダなどの旧宗主国との関係、そしてアメリカによる援助など、複雑に絡み合う様々な要素を組み合わせて比較・考察していく必要がある。その意味で、イギリス帝国とアジアとの関係を、長期的な視野を持って「アジアの経済的再興」と結びつけながら論じている本書は、この問題を考えていく上での重要なヒントになりうるのではないかと考えられる。

（福島邦久）

藤川隆男編
『アニメで読む世界史』

山川出版社、2011 年 9 月刊、A5 判、240 頁、
1500 円＋税、ISBN978-4-634-64054-2

本書は「世界名作劇場」で放送されたアニメ作品を題材に、アニメから近現代の世界史を読み解くことを目的としている。高等学校で必修科目の世界史を生徒に履修させていなかった、世界史未履修問題は記憶に新しい。また、大学入試センター試験において、世界史の受験者数は同じ地理歴史科目である日本史や地理の受験者数に比べて圧倒的に少ない状態が続いている。こうした若い世代の世界史離れが指摘される一方で、ゲーム、漫画、映画やドラマなど様々な媒体をきっかけとして幅広い年代に歴史ブームが起きているのも事実である。戦国武将ブームや歴女という言葉の普及はそれを象徴するものといえよう。しかし、このブームを引き起こした歴史は、用語や史実をいかにたくさん知っているかという暗記型の歴史に過ぎず、問題提起を伴う歴史学とは異なるものである。こうした世界史離れや暗記型の歴史を中心とするブームの中で、問題提起を伴う歴史学が歴史家や歴史学を専門とする一部の学生だけのものとなってしまうことは嘆かわしいことであり、解決されなくてはならない問題であろう。本書では、取り上げる時代をアニメという取り付きやすい題材からアプローチしている。そして、構成をソフトボール（野球の可能性もあり）に例え、「はじめに」と「あとがき」に関西弁口調の文体を織り交ぜるという編者のアイディアが、読み手に本書で扱う問題提起を伴う世界史をより親しみやすく身近なものとさせている。本書は、これまで問題提起を伴う歴史学に疎遠であった読み手にそうした歴史学の面白さを十分に伝えうる書物である。

アニメから様々な世界史を読み解くことが可能であると思われるが、本書は全体を通して近現代における人の移動及び国民国家の展開をテーマの中心に据えている。扱われる時代は 19 世紀が中心であり、地域はフランス、ドイツ、イギリスなど世界史において馴染み深い地域からオーストラリア植民地やアルゼンチンなどそうではない地域まで多岐に渡っている。19 世紀は多くのヨーロッパ人が新世界と呼ばれた地域に移住した時代である。また、このような移住と度重なる戦争を背景に、国民をまとめるための、もしくは国民が忠誠をつくすための国民国家が追求された時代であった。本書の親しみやすさとは裏腹に、扱っているテーマは 19 世紀の歴史を考察する上で必須のものである。

本書の構成は 9 章である。第 1 章から第 4 章までは、19 世紀におけるフランス、オランダやベルギーなどを含む低地地方、スイス、ドイツなどのヨーロッパ中心部の出来事を扱っている。次の第 5 章から第 7 章までは、それぞれイギリスとインドを結ぶ人の移動、イタリアからアルゼンチンへの出稼ぎ、スイスからオーストラリア植民地への移民に焦点を当てている。これらの章では、19 世紀中頃までに規模が拡大した、ヨーロッパからヨーロッパ外への人の移動を明らかにしている。第 8 章では、ヨーロッパ人が移住した地域の一つであるアメリカが取り上げられており、新世界と呼ばれた地域での先住民とヨーロッパ人との問題が鮮明に描かれている。第 9 章では、20 世紀のヨーロッパ中心部における移動に注目しており、この章によって 20 世紀へのつながりが示されている。このように、本書はおおよそ時代順の配列となっている。そのため、時代の流れが捉えやすくなっていると同時に、19 世紀における人の移動範囲が広がっていったことを見渡せる構成となっている。

アニメは誰もが取り付きやすい題材であるが、実際にアニメを用いて話をしようとすると難しい点も存在する。本書の「あとがき」にもハクション大魔王を知っているかどうかをめぐる、編者と執筆者のやりとりが語られているが、アニメは世代、性別、家族構成、居住地域などによって、その作品を知っているかが分かれるものである。そのため、アニメ作品を用いる場合は相手がどのくらいその作品を知っているかに注意しなくてはならない。編者は本書を「アニメから世界史が分かっ

て、受験を控えている人は読めば大学入試も通るし、サラリーマンの方には、同僚との会話のネタができる」（6頁）ものとし、幅広い層を読み手に想定している。このような場合にアニメを題材にすると、読み手の層によって作品を知っているかどうかに差異が生じやすく、一様に話を進めることが難しいのである。しかし、本書ではこのような困難を解決する工夫がされている。

一つは、日本に数多く存在するアニメ作品の中から「世界名作劇場」の作品を題材に選んだことである。「世界名作劇場」は、長期間に渡って繰り返し再放送されたこともあり幅広い世代に知られているものである。また、これらの作品は性別を問わずすべての子どもを視聴者の中心として想定したものでもある。つまり、多くの人が知っているアニメ作品なのである。もう一つは各章の構成にある。それぞれの章は、現代社会とアニメの舞台との共通点に言及することから始まる。いわゆる導入である。次に、あらすじが説明される。この部分によって、作品を知らない読み手でもストーリーや世界史を読み解く上でポイントとなる場面を容易に理解できるのである。また、作品を知っている読み手にとって、この部分は様々な場面を思い出す箇所となり、本書に最も親しみを感じる部分の一つとなるであろう。あらすじの説明の後には、アニメの原作となった小説の書かれた時代や原作者の生い立ちなどが述べられる。それから、原作との違いやアニメの対象となっている時代では起こりえない出来事などが指摘される。この部分が世界史と結び付ける主な役割を果たしているところである。そして最後に、現在におけるアニメの舞台の様子や問題提起などで章は締めくくられる。おおよそこのような章の構成をとることにより、本書は取り上げられている作品を知っているかどうかにかかわらず、すべての読み手にアニメから世界史を読み解くことを可能としている。

「楽しくなければ、歴史じゃない」（227頁）。誤解を恐れずにいえば、この点は編者が本書において重要とした点の一つであると思われる。では、現在の人間にとって楽しい歴史とはいかなるものであろうか。様々な答えが挙げられると思うが、その一つにアクチュアルな問題提起を伴う歴史があげられよう。現在の社会から乖離した歴史学が社会で必要とされるとは考えにくい。また、ごく一部の分野や領域に精通している者にしか通用しない歴史も多くの人にとっては退屈なものになりがちである。現代社会に関わる歴史学こそが多くの人々の興味を引き、社会に訴えることができるものと言えよう。第3章では「家なき子レミ、ペリーヌ物語」を題材に19世紀フランス社会が扱われる。章の最後では、現代社会における派遣切りや公立高校の授業料無償化の問題が19世紀フランス社会と結び付けられており、まさに現代社会に関わる歴史が提示されているといえる。また、「家族ロビンソン漂流記――ふしぎな島のフローネ」を題材とした第7章では、オーストラリアの先住民をめぐる貧困や差別などが現在まで継続する問題として提示されている。本書はこのように現代社会に関わる歴史を取り上げることにより、楽しい歴史学を提示している。本書には前述した箇所以外にも多くの箇所で現代社会に関わる歴史が提示されている。ここでは紙幅の都合で紹介しきれず割愛せざるをえないが、ぜひ本書を手にとって一読していただきたい。

そしてもう一つ、「とても小さなエピソードから、私たちの本当の姿が見えるときがある」（9頁）、これもまた編者が本書で大切にした点であると思われる。本書で世界史を読み解くために使われるアニメは世界に数多く存在するアニメ作品の一つにすぎない。場面となるとそれらの作品の一部、映像にしてわずか数秒のものである。しかし、その一瞬の場面に現代社会に関わる歴史が含有されているのである。19世紀はグローバル化の進んだ時代である。そのため国民国家に代わる広域の地域や世界システムによって19世紀の世界史を分析する方法がある。また、特定の場所や特定の出来事、日常生活からそれらによって構成される19世紀の世界史を見る方法もある。本書はアニメの一場面に含まれる特定の場所や出来事から19世紀における人の移動及び国民国家の展開を捉えており、後者の分析法による歴史学の面

白さを提示している。ただし、本書が前者の分析法を否定するものではないということを念のためここに記しておく。

ここで、本書で取り上げられているアニメ作品を示しておく。上述の作品に加え「レ・ミゼラブル　少女コゼット」「フランダースの犬」「アルプスの少女ハイジ」「小公女セーラ」「母をたずねて三千里」「トム・ソーヤの冒険」「トラップ一家物語」が題材とされている。これらのアニメ作品が多くの人々に親しまれたように、歴史学もしくは世界史が多くの人々に親しまれる、そんな可能性を本書は秘めているといえるであろう。最後に、関西弁口調の文体を用いながら楽しい歴史学を示した編者に敬意を表し、関西弁で本書の紹介を終えたい。[こんなええ本、早よ買わな売り切れるでー]

（矢野涼子）